

⑨ 広報市民リポーターだより

# やま 鉱山の 技術を生かせ

リポーター 飯塚家司 (新町)

かつてあれほど勇姿を誇った鉱山が、という表現は失礼かもしれませんが、大館の重要産業を担ってきた同和鉱業(現花岡鉱業)もすでに資源が枯渇に近い状況です。しかし、鉱山は掘りつくせば終わりという一般の概念に対する挑戦のひとつとして、産業廃棄物事業を興すという事を知り、そこに至るまでのいきさつや将来性について伺おうと、新会社「同和クリンテックス」へ足を運んでみました。

## 今なぜ

### 産業廃棄物処理か

昨年私は、日本医工の関社長、市環境衛生課(沼館)の畠山課長、木村課長補佐からお話を伺う機会がありました。そのとき、首都

▲吉田社長から取材する 飯塚リポーター(右)



圏のように夢の島という人工島を造ってまでゴミ処理しなければならぬ事態は、大館にもまったく無縁ではないかと考えていました。そんなことも私が「クリンテックス」に興味を持った一因です。また、大館の産業基盤を過去から現在にわたって支える地場産業を包含し、変化させ、新しい形を生み出そうとする企業の進出は、既存の産業を再生できるという実質的な期待とともに、やればできるという心の満足感、意欲を感じさせてくれます。

さて、吉田社長から「今なぜ産業廃棄物処理業を興すことになったのか」「営業範囲はどうなるのか」「P・C・B、水銀は取り扱うのか」の三つを中心に伺いました。

「吉田社長から」とおり、円高によ

って鉱山経営は非常に厳しく、経営換行為としては遅すぎたらしいがなきにしもあらずです。しかし、今からでもという気持ちで昨年から開始しました。

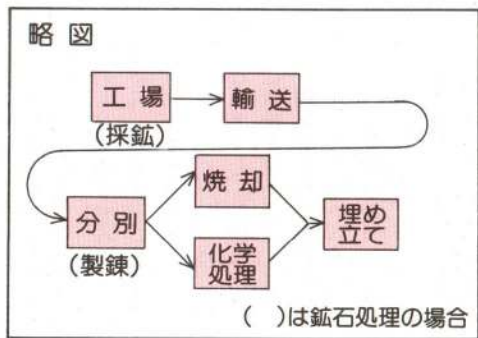
現在は鉱山のような素材型産業より素材加工型産業が求められており、鉱山とは別の次元で生き抜く方策を立てなければなりません。小坂の場合は精錬所があり、海外からの原料入手によって生き延びられるでしょうが、花岡は採掘だけでしたので、何によって生き延びるかを検討してきました。その答えの一つが「クリンテックス」なのです。

産業廃棄物処理の工程は略図のとおりですが、鉱山の作業と似かよっているのがわかると思います。したがってごく自然に取り組める、これが答えの第一の理由です。また、出鉱は減っても人は残りますし、人は技術を持っています。その人たちが活躍できる事業であることが二つめの理由です。これには、現在二カ所にある選鉱所の一方を活用できるという付随的な理由もありました。

東北には現在、太平洋側で福島日本海側で新潟にと二カ所に産業廃棄物処理会社がありますが、将来的な処理量の増加を考えると、この二つでは限界が見えていると言わざるをえません。さらに産業廃棄物は、本来各企業で処理するのが建前ですが、実際にはほとんど行われていない、大都市周辺の企業がもし実行しようとしても、すでにその処理量は限界を超えるとも言われています。

また、今や産業構造においてハイテク産業が占める割合は高く、仮に大館へこの種の産業誘致を考えたとしても、産業廃棄物処理場が近くにあることは進出企業にとってコストが安くなるというメリットをもたらすはずですが。

これらの理由、背景からクリンテックスが生まれたのです。



## 営業範囲は どのようなもの

先にお話したように、既に二つの会社がありますから、東北・県内だけでは処理申込量が足りないと思われま。もちろん東北圏からの依頼だけで処理能力をまかなえれば、それはすなわち産業が活性化することになりますが、やはり五〇％程度は関東圏、残りを東北圏でまかなうことになるでしょう。

## P・C・Bや水銀は 取り扱いますか

P・C・Bと水銀、両方とも取り扱い品目に入っていません。ちなみに水銀については、国内でただ一カ所、北海道のイトムカ水銀鉱山で処理されています。処理費用は輸送費を含めてトン当たり十万円かかるということです。皆さんにとって身近な産業廃棄物をあげますと、まず建設、土木作業による廃土処理が対象です。生コンもペーハーが一〇〜一〇・五程度ですから、中和処理をしなければなりませんし、ドライクリンテックスに使うパークロールエチレンというのも地下水にまで浸透してしましますから処理する必要があります。

ここでは、重金属は化学分解して、物質本来の性質にもどし、流出しないよう固体化して埋め立て、鉱山にあった状態に近くして、自然へ返してやります。

以上のようにいろいろ伺ったのですが、とても全部は紹介できません。ただ、一連のお話の中で「自然へ返してやる」という言葉が印象に残り、何かロマンを感じさせられました。ゴミにロマンはおかしいでしょうか。

物を作り出すだけが産業ではありません。むしろ自然にさからわないように処理していくことの方が今後はますます重要となるでしょう。確信めいた思いを胸に帰路につきました。

◆広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載しています。